

(東女医大誌 第41巻 第6号)
頁 433~ 436 昭和46年6月)

〔臨床報告〕

リンパ管造影を行なった乳糜尿症の1例

東京女子医科大学三神内科教室 (主任 三神美和教授)

安 食 僖 三 ・ 講 師 竹 内 富 美 子
ア ジキ キ ソウ タケ ウチ フ ミ コ
教 授 小 山 千 代 ・ 教 授 三 神 美 和
コ ヤマ チ ヨ ミ カミ ミ ワ

東京女子医科大学病院中検寄生虫部

講 師 山 口 昇 ・ 渡 辺 俊 子
ヤマ グチ ノボル ワタ ナベ トシ ヨ

東京女子医科大学放射線医学教室

石 川 み どり
イシ カワ

(受付 昭和46年4月10日)

緒 言

乳糜は腸で作られるが、正常の場合、これは乳糜槽から上行し胸管に注ぐ。乳糜尿とはフィラリヤ症、外傷、悪性腫瘍(縦隔および腹腔内)、縦隔および後腹膜リンパ節の炎症(結核)、腎周囲炎、膿瘍、脊椎カリエス、その他の場合、乳糜が上記リンパ流を通らずに腎リンパ系に逆流し、尿中に排泄されるものをいう。

最近、リンパ管造影術が発達し、後腹膜リンパ管造影が頻回に行なわれるようになった。

今回、私達は20年来、乳糜尿を主訴とする患者にリンパ管造影術を施行し、その結果、興味ある知見を得たので、その経過を報告し、若干の考察を加えたい。

症 例

患者：大〇と〇え、54才、女性、主婦。

主訴：乳糜尿および全身倦怠感。

家族歴：特記すべきことなし。

既往歴：静岡県三島で出生、以後同地に在住、26才で子宮後屈の手術を受けた。

現病歴：昭和26年頃より尿の混濁に気づいていた。その後この尿は白濁し、全身倦怠感が出現したため、A病院を受診し、薬物療法を受けたが、症状の改善がみられないまま放置していた。同40年春頃より、尿中に寒天様浮遊物が生じ、タマネギ様臭気を放つようになり、B病院を受診し、薬物療法などにより尿所見および全身倦怠感の改善がみられた。しかし同44年6月頃より、再び尿の白濁、全身倦怠感を認めたため、B病院を受診し、左腎機能低下を指摘された。同45年夏頃より、これらの症状が増強したため、同年9月16日に当科を受診し、同45年9月30日入院した。

現 症

体格中等度、栄養状態やや不良、血圧 138—80 mmHg、体温36.9°C、脈拍60/分で整、皮膚はやや蒼白で乾燥し、顔色および眼瞼結膜に軽度の貧血

Kizo AJIKI, M.D., Fumiko TAKEUCHI, M.D., Chiyo KOYAMA, M.D. & Miwa MIKAMI, M.D. (Mikami Clinic, Department of Internal Medicine, Tokyo Women's Medical College), **Noboru YAMAGUTI, M.D., Toshiko WATANABE** (Department of Parasitology, Tokyo Women's Medical College) and **Midori ISHIKAWA, M.D.** (Department of Roentgenology, Tokyo Women's Medical College): A case with Chyluria used lymphangiography.

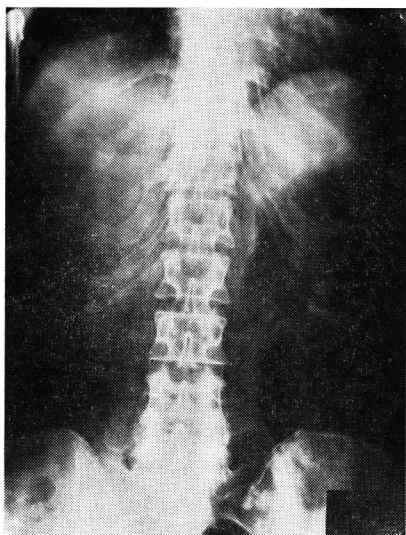


写真 2

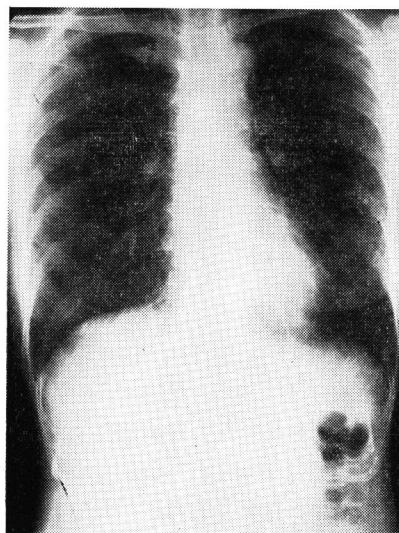


写真 4 胸管造影像に異常所見はない。

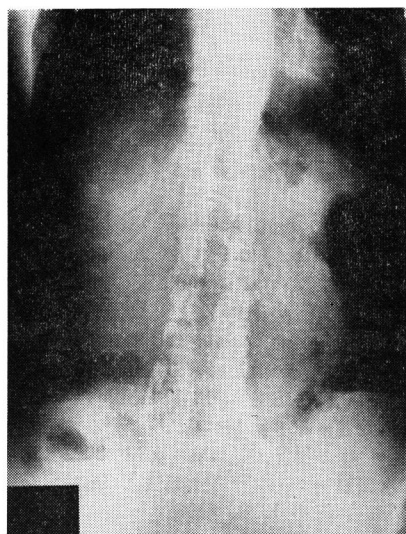


写真 3 リンパ管造影像(旁腹部大動脈部より左腎臓部に逆流する多数の迂曲したリンパ管の増生と拡張が著明にみられる)

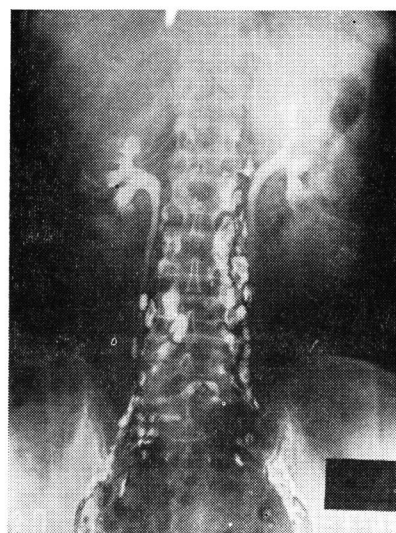


写真 5 静脈性腎盂造影像と24時間後のリンパ節造影像。

動脈部より左腎臓部に逆流する多数の迂曲したリンパ管の増生と拡張が著明にみられた。これは左腎杯部のリンパ管の増生、吻合像と考えられた。また骨盤部においても増生、拡張、迂曲したリンパ管が残存していた。写真4は注入後90分の胸管X線像であり、閉塞像やうつ滞像および蛇行像等は認められなかった。写真5の静脈性腎盂造影像では、両側ともほぼ正常であった。なおこの写真

にはリンパ管造影術後24時間のリンパ節造影像もみられるが、これらのリンパ節の内部構造には特異な所見は認められなかった。

入院経過

入院後、尿の白濁は安静時に軽減し、食後、特に脂肪摂取後に増強し、全身倦怠感が認められた。安静と食餌療法(低脂肪食)により、尿白濁および全身倦怠感の改善がみられ、昭和45年10月

24日に退院した。

総括および考按

リンパ管造影術の臨床への応用は、1952年、Kinmonth¹⁾が末梢リンパ管を染色して分離し、そこから造影剤を注入する Direct lymphography を発表して以来、盛んに利用されるようになった。1962年、Turiaf²⁾は初めて乳糜尿症に同方法を用い、後腹膜リンパ系と尿路との交通を証明する特別な所見を示した。その後、わが国においても王丸³⁾、阿世知⁴⁾、中村⁵⁾、岡元⁶⁾、永田⁷⁾らにより乳糜尿症におけるリンパ管造影術の報告がある。これらの諸家の報告では、腎臓部にリンパ管の増生、拡張、迂曲像がみられ、これらのリンパ管と腎盂とが交通するため、乳糜尿が発生することが証明された。

乳糜尿は、寄生虫性のものと、非寄生虫性のものに大別されるが、前者による乳糜尿は、本邦の沖縄や九州南西部にみられるものと、または他の地域でみられるものとあり、その大多数の症例は、*Filaria Bancrofti* の感染によるフィラリア症に由来し、非寄生虫性のものは極めて稀であると言われている。*Filaria Bancrofti* は好んでリンパ系に寄生し、象皮病、乳糜尿、その他の症状を起こす。本症例は、外傷、悪性腫瘍などの非寄生虫性の原因は否定され、リンパ管造影術で左腎臓部に上述のごとき所見がみられ、フィラリアによる乳糜尿症が最も考えられた。しかし、本症例においては、フィラリア症の経過中に最も普通にみられる熱発作の既往歴がなく、また好中球の増加、単球の減少などの他の症状は認められず、乳糜尿が

唯一の症状であつた。患者の居住地の静岡県は稀であるが、1958年、佐々、1960年、石崎らにより、フィラリア症の報告があること、フィラリア皮内反応陽性、スパトニン服用による悪心、皮膚癢痒感の副作用などにより、本症例の乳糜尿は、*Bancroftian filariasis* により生じたものと診断した。

結 語

20年来の乳糜尿を主訴とする54才の女子に、リンパ管造影術を行ない、左腎臓部のリンパ管の増生、拡張、迂曲像などを認めた。この乳糜尿は出生地、臨床症状、検査所見、とくにリンパ管造影像などにより、フィラリア症によるものと診断し、併せて若干の文献的考按を行なつた。

稿を終るに臨み、フィラリア免疫血清学的検査に御助力を賜わつた横浜市立大学（寄生虫学教室）山本久助教授に深謝致します。

（本論文の要旨は、昭和46年3月13日、第217回内科学会関東地方会において発表した。）

文 献

- 1) Kinmonth, J.B.: Clin Sci 11 13 (1952)
- 2) Turiaf, J. et al: Bull. Soc. Med. d hop. de Paris 113 753 (1962)
- 3) 玉丸鴻一・他: 日泌会誌 54 914 (1963)
- 4) 阿世知節夫・他: 皮と泌 26 177 (1964)
- 5) 中村 宏: 臨皮泌 18 174 (1964)
- 6) 岡元健一郎・他: 本邦における乳糜尿の分布と治療の現況. 日医事新報No. 2052 12 (1963)
- 7) 永田耕一: リンパ系造影法による乳糜尿の研究. 泌紀要 13 85 (1967)